

延喜式の布
日本計量史学会理事

新井宏

先日、文化総合雑誌『悠久』(おうふう社)から「延喜式の布」という特集を企画するので「延喜式の度量衡」というタイトルで小論文を書くようにとの依頼を受けた。もう二十年以上も前に載せた『計量史研究』の「古代尺度復元法(2)」の一部を見てとのことである。

その時に書いたのは、延喜式の式内社の四時祭などに支給される調布や庸布の長さ規定のことである。

延喜式では一端の長さは四二尺であったので、当然、端単位とか四二尺の整数倍の規定が多い。その中で、奇妙なことに、一端一三尺とか三端四尺とか七端三八尺とか端数の付く規定が、繰り返して現われるのである。

計量史を研究していると、新単位が規定されると旧単位から換算して示される例が多い。メートル法になつてからも、建築部材に九一〇^リが残り、売出中の土地三〇坪を九九^mと記すようなものがある。

そしてすぐに解つたのは、五二尺の整数倍と五五尺の整数倍を示す二つのグループがあることである。

この内、五二尺は前代の養老令に規定された端の長さが五二尺であったから簡単に説明が付く。

問題は、五五尺で示された基準長の端である。あるいはこれが日本古来の布の単位長さを反映しているのではないか。

すなわち、唐制導入当時の唐尺は短めで正倉院に残る宝物尺の実長も二九・五^キのものが多く、五五尺は一六・二^リほどになる。

それに対して、朝鮮半島の例では『三国史記』の新羅本記の文武王五年(六六五年)に「絹布はもと十尋を一匹としたが、それを改め、長さ七歩、幅二尺で一匹とした」とある。尋は両手を広げた長さであり、十尋は一六・二^リほどである。

注目すべきことは、これら長さが筆者の提唱している「古韓尺」の十歩に一致していることである。

さて、本題の延喜式の布について述べよう。延喜式を詳細に読めば、絹・繩の疋・匹の面積や調布の端の面積が判る。

一方これらの素材である絲や綿についての重量単位、絢や屯についても延喜式の中に、両との関係が示されていて、現代の重さを知ることが出来る。

後は、面積と重さの関

係を結びつける資料があれば、布の平米当たりの重量が計算できる。

そこで注目したのが、延喜式の一駄の荷量、すなわち、絹は七十疋、繩は五十疋、絲は三百絢、綿は三百屯、調布は三十端、庸布は四十端、銅は百斤、鉄は三十廷の基準である。

このことから、一駄の重量は、絲が五十六^キ、綿が四十五^キ、銅と鉄は六十^キと計算される。そうすると、疋や端の重量や平米当たりの重量は、

絹 平米 七〇^{グラ}
繩 平米 一〇〇^{グラ}
調布 平米 一八〇^{グラ}

となる。ちなみに、筆者が現代の繩のシヨールを測つたところ平米九〇^{グラ}であった。また、綿の手拭いは平米一二〇^{グラ}、薄手のタオルは一七〇^{グラ}であった。大きく食い違っていることはないようである。

最後に、絹や繩、調布、絲や綿の重量当たりの価格について米と比較して示す。

絹 百三十 倍
繩 九十 倍
調布 二十五倍

計量と言う地味な世界でもまだまだ面白い情報がある。

(前韓国国立慶尚大学招聘教授、元日本金属工業常務、金属考古学、計量史)